

地域と共に創りあげる生保内川・癒しの溪流づくりの現状と課題

岩手大学農学部 学生会員○丹野 雄介
岩手大学 正会員井良沢 道也

1. 背景と目的

現在、多自然川づくりが全国的に進められているが、いわゆる砂防対象である溪流についての報告事例は少ない。しかし、河川に比べてスケールは小さいものの、溪畔林、瀬と淵など自然の豊かさに富んでおり、今後、多自然溪流づくりの推進が望まれる。秋田県仙北市の生保内川は昭和35年8月の洪水で15名が犠牲となった災害の歴史があるが、日常は人びとの心身に安らぎと憩いを与えてくれる秋田県内屈指の清流である。平成13年から健常者、高齢者、そして障害のある人にとっての福祉・健康増進の場として、地元の方々が主体となって「癒しの溪流づくり」が行われており、その現状と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 調査地概要

(1) 秋田県仙北市の概要

調査対象地である秋田県仙北市は秋田県東部ほぼ中央に位置し、東は奥羽山脈が岩手県との県境となり、北は八幡平連山によって鹿角市と接し、市のほぼ中央には水深日本一の田沢湖を有するなど豊かな水資源は地域産業発展の大きな役割を担っている。

(2) 「癒しの溪流づくり」の概要

「生保内川癒しの溪流づくり」は、仙北市東部に位置する奥羽山脈を源とする生保内川流域で八幡平山系直轄火山砂防事業の土砂災害防止のために整備した、「生保内川遊砂地大暗渠砂防えん堤」周辺の自然豊かな溪流空間を、身障者も含めたすべての人々が五感で癒しを感じ得る場として整備し、行政と市民が体となって活用する日本で最初の取り組みである。

この取り組みは、溪流のもつ「癒し効果」を高齢者・子ども・障害者・健常者の健康づくりの場、心身の癒しの場、さらには医療・福祉機関との連携を図った心身のリハビリテーションの場づくりをめざしている。平成13年度から学識者及び医療福祉関係者等を委員とした「癒しの溪流づくり懇談会」を皮切りに、平成15年度には、秋田県、田沢湖町（現仙北市）、地元の医療・福祉関係者並びに市民活動グループが加わった「癒しの溪流づくり検討会」を開催するなど計画の具体化を図ってきた。

さらに、平成16年度と平成17年度にはこの取り組みを実現するため「勉強会」を設置し、多くの地元住民の参加を得て、十数回にわたるワークショップを重ね、癒しの溪流での住民活動の具体化、支援組織等の具体化を行った。一方、平成17年度からは毎年地元住民が中心となり、生保内川を利用した「癒しウォーク」や「癒し de 交流」など、高齢者や子ども、車イス利用者も参加した交流イベントを開催してきた。

3. 調査方法

平成18年に住民が主体的となって設立したNPO団体「癒しの溪流・里・まちネット」（以下NPO団体）の理事長や役員、国土交通省湯沢河川事務所、仙北市の建設部に対する聞き取り調査を行った。秋田県仙北市生保内地区内の生保内川からの距離がそれぞれ異なり、近い順に沼田地区・久保地区・横町地区・宿北地区・宿南地区・男坂地区の計6地区の住民に対してアンケート調査を行った。またその地区会長それぞれに聞き取り調査を行った。



図1 位置図（広域図）

4. 調査結果

アンケート調査の回収率は、配布部数が 398 部、回収部数が 238 部で 6 割近い回収率であった。右の表-1 が質問項目一覧である。下図-2 (Q6) より、NPO 団体によって行われているイベントの認知度は過半数を超える結果となった。一方そのイベントの参加率は 3 割にも満たない結果となった(下図-3、Q7)。下図-5 より、地区別に見ると生保内川一番近い沼田地区が認知度・参加率共に最も良い結果となった。

また、6 地区の住民に「癒しの溪流」に関して思っていることを聞いた回答として最も多かったのは地域に盛り上がり进行するものであった。しかし、改めてイベント等に参加したいという回答は最も少ない結果となった(下図-4、Q16)。

表 -1 質問項目一覧

質問項目	回答形式
Q1 生保内川に行ったことがあるか	単一回答
Q2 生保内川に行く頻度	単一回答
Q3 「癒しの溪流」箇所に行ったことがあるか	単一回答
Q4 「癒しの溪流」箇所に行く頻度	単一回答
Q5 「癒しの溪流」のお気に入りの箇所	複数回答
Q6 イベントの認知率	複数回答
Q7 イベントの参加率	複数回答
Q8 イベントを知った経緯	単一回答
Q9 イベントに誰と参加したか	単一回答
Q10 参加した感想	単一回答
Q11 イベントの参加頻度	単一回答
Q12 再び参加したいか	単一回答
Q13 再び参加したい理由	複数回答
Q14 「癒しの溪流」で改善点	複数回答
Q15 どのようなイベントであれば参加するか	自由記述
Q16 「癒しの溪流」についてどう思うか	単一回答

5. まとめ

平成 16,17 年度に行われた「勉強会」の結果として住民主体の NPO 団体が平成 18 年度に設立された。NPO 団体設立から 5 年が経った現在のイベントに関する認知度はアンケート調査を行った 6 地区に限ると 5 割を超えているというのが現状である。しかし、地区別に見ると、川から遠い横町地区と宿南地区の参加率が非常に低いという点も現状として挙げられる(下図-5)。また、下図-3 の参加率が認知度の割に低いことや、下図-4 の「これからはイベントに参加したい」という回答率の低さが、課題であると言える。いかに活動に興味持ってもらい、参加してもらうかを考えることをこれからの NPO 団体の活動方針の 1 つにすべきではないだろうか。

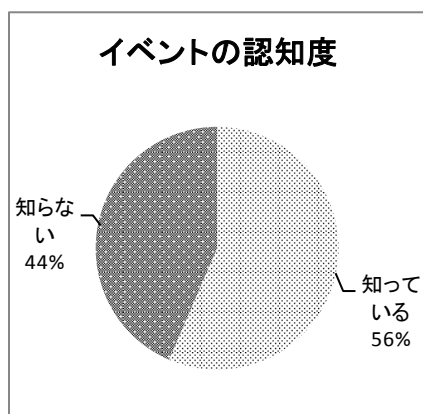


図-2 イベントの認知度 (n=216)

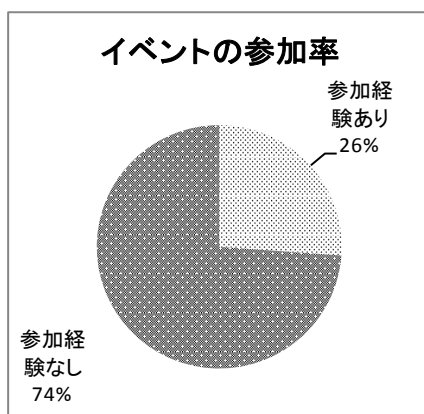


図-3 イベントの参加率 (n=283)

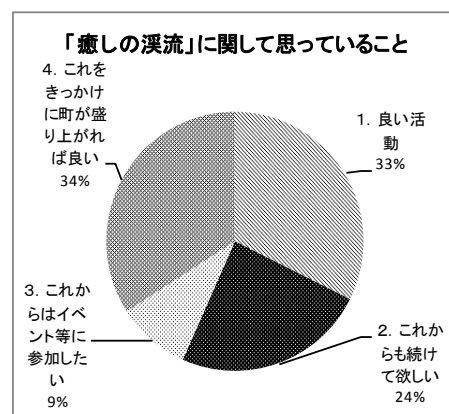


図-4 癒しの溪流に関して (n=173)

謝辞

なお本研究を進めるにあたりご協力いただいた NPO 団体役員の皆様、また各地区会長の方々そして癒しの溪流フォーラムのコーディネーターを務めた丸井英一氏には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

国土交通省湯沢河川国道事務所(2005)癒しの:溪流づくり検討業務報告書,p.1~65
多自然研究第 163 号(2009):生保内川癒しの溪流づくりについて,p.12

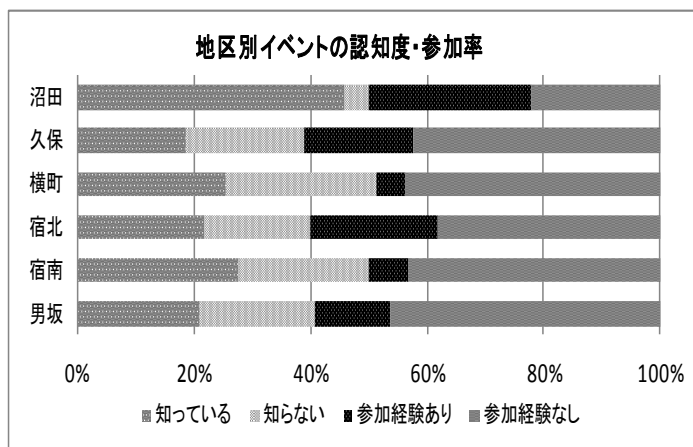


図-5 地区別イベントの認知率・参加率 (n=499)